おもしろかったので ちょっと感想を。

本屋大賞12作品 読んでみました。

毎年春に発表される【本屋大賞】。一位受賞作品を全作読んだので、感想文を書いてみました！個人的な感想なので、様々なご意見があるとは思いますが、本を手に取る楽しさをお伝えできたらイイな♪

博士の愛した数式

小川　洋子　著
新潮社
2004

交通事故のため、80分間の記憶しか持たない数学博士と、家政婦教会から派遣された家政婦とその10歳の息子。3人の交わりを描いた物語。その日々の生活の中で起きていく様々な出来事、アクシデント、博士にとっては冒険のようなこと、色々な要素が絡み合い、「仕事」を超えて、慈しみや愛や尊敬が溢れだす。美しくて、でも切なく哀しくもある。というよりは、哀しいけれど輝きに満ちているというべきか。「小川洋子の作品は美しい」と感じる一冊。物語は淡々と綴られていくが、心は大きく揺さぶられます。

東京タワー　オカンとボクと、時々、オトン

リリー・フランキー　著
扶桑社／新潮社（文庫）
2006

小説というわけではなく、著者本人の「記憶に基づいた実話」なのだそうだ。父親不在の子どもから少年期、15歳で家から離れ30歳までの自堕落な生活…そして母親と暮らしはじめてようやく親孝行、という時にがんに侵されて亡くなってしまうオカン。終盤は涙しながら読む人も多いだろう。読みながら、自分と親との関係、自分と子どもとの関係を投影させてしまう。大切な人を想う気持ちと失う恐怖。一生懸命に子どもを育てた母親と育てられた息子の、お互いの愛情。当たり前の親子愛なんだけども、最後はやっぱり切ない。

ゴールデンスランバー

伊坂幸太郎　著
新潮社
2008

首相暗殺という濡れ衣を着せられた男の逃亡劇だ。映画を観た人もいるだろう。「あり得ない！」という事が次々と起こり、なぜこの人が助けてくれるのか？そんなに上手くいくか!?と疑問に感じることも多々あるが、単純に小説を楽しむと思えば気にならないだろう。結局事件は解決したのか？と問われれば、なんの解決にもなっていない…と言うのが正直な気持ちでスッキリ感は無い。個人的には、ストーリーへの関係性が薄い、この主人公の両親が好きだ。マスコミへの対応、逃亡中の息子への呼びかけ…いちばん共感できる。

夜のピクニック

恩田　陸　著
新潮社
2005

この本は、高校時代に経験した方も多いだろう「強歩遠足」というイベントの中で、少年と少女の、それぞれの複雑な家庭環境における心の揺れ動きを描いた青春小説です。10代から20代の若い人が読むと共感できる部分が多いだろうし、大人が読むと懐かしい感情が湧きあがり、若かりし日の自分の気持ちに戻るだろう。激しい恋愛やミステリーは皆無。だけど引き込まれる。友情や切なさと、少しのワクワク感の中で読み続けることができ、読後は穏やかな幸せが訪れる。心は清涼感で満たされた。率直に「良い本だな」と思う。

一瞬の風になれ

佐藤多佳子　著
講談社
2007

男子高校生が陸上競技の中で才能を伸ばし、友情、ライバルとの関係やちょっぴり恋もしながら成長していく過程を爽やかに描いている。スポ根と言うには爽快すぎる。男子生徒の語り口で物語が進んでいくので、読みながら陸上競技を、トラックを、走っている爽快感を体感できる。応援してくれる両親、大好きな兄に対し「サッカー」ではコンプレックスを感じていた自分。指導者や部活仲間とのやりとりなど、感受性の強い十代の気持ちや心の揺れ動きが素直に描かれている。読んでいる時間は高校生の自分に会えるかも。

告白

湊　かなえ　著
双葉社
2009

「面白くて一気に読めた」と言うべきか、それとも「心の中に言いようのない不安感が残る後味の悪い印象」と言うべきか。「面白くて」という表現とはちょっと違っているようにも思う。どうしてそうなったのか？その理由は？と知りたい欲求で読み続けただけかもしれない。それが著者の狙いなのだろうか。私としては、「是非この本を読んで！」と人に勧めることは難しい。愛情どころか感情もあまり感じない登場人物に、読後は喪失感ばかりが心に残り、胸がざわつく。読み手によっては、かなり違う感想を持つ本かもしれない。

天地明察

冲方　丁　著
KADOKAWA　角川書店
2010

江戸時代において、天文学・数学・暦学に情熱をかけた渋川春海という歴史上の人物を描いた作品。改暦に取り組む苦難や挫折、喜びなどと共に、主人公を取り巻く人間模様が描かれている。現代は当たり前にある暦が、こんなにも多くの人の努力の上で成り立ったのだと、その経緯を初めて知ることができた。主人公・渋川の、人から信頼され助けられる何かを持つ人柄を感じさせる。その妻や理解者・支持者たちも個性的かつ魅力的で、また清々しくもある。登場する歴史的人物がどのような人間だったのかも知る事ができます。

舟を編む

三浦しをん　著
光文社
2012

辞書編纂というプロジェクトを完遂させるまでの苦労や裏話などが描かれている。テーマは重厚さを想像させるが、かなり軽いタッチで描かれているのでさらっと読めてしまう。じっくり読むには物足りないが、ユーモアがあって楽しく読めるのでちょっとした息抜きには丁度いい感じ。思わず笑みを押さえられない場面もあるので電車やバスの中で読むときはご注意を。文体は読みやすくライトノベル感覚。「言葉の海へ漕ぎ出す舟（辞書）を編む」という意味での「舟を編む」。学生時代に紙を捲り辞書を引いていた感覚が蘇る。

村上海賊の娘

和田　竜　著
新潮社
2014

長編の歴史小説を初めて読む。想像通り最初は登場人物の関係性と名の読み方などに苦労することとなり、読み進めるのが苦痛であった。しかし主人公である「娘」の登場で途端に惹きつけられ、その漫画じみた破天荒さから目が離せない。下巻で繰り広げられる海戦、その興奮が読んでいる自分にも乗り移る。まるで自分もその場にいて、荒くれ者たちと一緒になって戦っているようだ！もう最後まで読まなくちゃ気が済まない！読み終えると、侍のように雄叫びをあげたくなるような高揚感が残るので就寝前にはご注意を。

謎解きはディナーのあとで

東川　篤哉　著
小学館
2011

刑事という職業を選んだ財閥のお嬢様が、執事の推理力により難事件を解決するミステリー。執事や先輩刑事などのキャラクターや、主人公との掛け合いがコミカルに描かれ、文体も軽いので、あまり本を読み慣れない人や、小・中学生にとって読書のきっかけ作りになる一冊かもしれない。巧妙なトリックや伏線があるわけではないので、ミステリーとして読むには物足りなさを感じる。事件一件ごとの短編集のような作りなので、用事の合間のすき間時間で読むことができ、単純にコミックを読む感覚なら楽しめるだろう。

海賊と呼ばれた男

百田　尚樹　著
講談社
2013

出光興産創業者をモデルに描いたフィクション。戦前戦後の石油業界の様々な問題（官僚や戦勝国との利権争い）について詳しく書かれ、興味深く読めた。ただ、なにしろ主人公の愛国心や正義、苦難からの復活が、これでもかと言うほど何度も繰り返される。読み手としては、少し礼賛しすぎでは？との思いが湧きあがる。（実際に創業者は立派な人間だったとしても、だ。でもフィクション小説だから、それはそれで良いのかも）。そしてあまりにも説明が長い事に辟易する。文章は読みやすいが、そのクドさが残念。

鹿の王

上橋菜穂子　著
KADOKAWA　角川書店
2015

最初はカタカナの固有名詞に慣れず、人間関係や土地名との関係を確認するために戻って読み返す作業を繰り返す。いわゆる夢のあるファンタジーではなく、民族間の争いや病との闘い、そして医師の倫理観など、描かれるテーマは現代社会で抱えている問題と同じで考えさせられる事が多い。でも、重たい雰囲気になりがちなテーマの中にも、温かい人間関係、それぞれの相手を大切に想う気持ちが描かれ、優しい気持ちにもなれる。個性的な登場人物や動物の動く様を生き生きと表現し、読み手の頭の中でしっかりと映像化できる。